著作権保護コンテンツ

LEO LIONNI

特集

夏休みは原画展を見に行こう！

レオ・レオニ

I 〈絵本のしごと展〉

写真／「レオ・レオニ　絵本のしごと」図録より

小学校の教科書にも掲載されている『スイミー』をはじめ、自分らしく生きることをテーマにしたおはなしや勇気を与えてくれるおはなしを、コラージュや水彩、油彩など、さまざまな技法を使って表現しているレオ・レオニ。その作品世界は見る人を幸せにしてくれるものばかりです。

『あおくん と きいろちゃん』
作／レオ・レオーニ　訳／藤田 圭雄
1,200円（至光社）

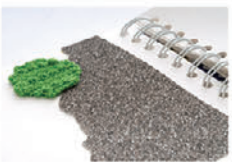
孫たちにせがまれ、偶然に生まれたおはなしがレオニの最初の絵本。あおくんはいちばんの仲よしのきいろちゃんと遊びたくなって、あちこち探し回ります。ようやく出会ったふたりがうれしくてくっつくと、緑色になっちゃった！

目の不自由な人も読める――フランス語版　あおくん と きいろちゃん

あおくんときいろちゃんが緑になっていくシーン。それぞれ手触りが違います。

帰り道で飛んだり、はねたりするあおくんときいろちゃん。主人公のふたりはモコモコ。

緑がお山に登るシーン。山はザラザラした手触り。



著作権保護コンテンツ

夏休みは原画展を見に行こう！

HANS FISCHER

ハンス・フィッシャー Ⅱ

『こねこのぴっち』『長ぐつをはいたねこ』などでおなじみの絵本作家ハンス・フィッシャー。郷里のスイスでは、壁画や版画、教科書の挿絵、舞台芸術など幅広い活躍をした芸術家として知られています。絵本だけにとどまらないフィッシャーの軌跡をご紹介します。

写真／「ハンス・フィッシャーの世界」より

フィッシャーを追い続けて

物語を語るような、生き生きとした線。フィッシャーの魅力にとりつかれ、現在約200点以上の原画作品を所有するようになった小さな絵本美術館館長・武井利喜さんにお話を伺いました。

撮影／石川正勝　取材・文／菅原千賀子

かつて瀬田貞二さんのご自宅に集まり、ヨーロッパで収集した絵や古書を拝見する機会がありました。そこでスイスの教科書に描かれたフィッシャーの絵と出合い、衝撃を受けたのです。『こねこのぴっち』の作者として認識していたものの、異なるタッチで描かれた淡い色鉛筆の線はまるで物語を語っているようでした。こんな絵を毎日見ているスイスの子どもはみんな芸術家になるんじゃないかと思ったほどです。

のちに美術館をオープンしてから、フェリックス・ホフマン展覧会の準備のためにスイスを訪れました。チューリッヒのヨハンナ・シュピーリ研究所を訪れた際、フィッシャー家の連絡先を教えてもらい、翌年スイスで開かれる展覧会でご家族たちと会う約束をとりつける幸運が突然訪れたのです。

翌年、フィッシャー展の会場では、多彩な100点以上の作品にすべて値段がつけられ売られていました。「お父さんの作品が散逸してしまいますよ」と息子のカスパールさんに忠告すると、彼らは芝居の道を続けるためのお金が必要なようでした。日本でも展覧会をやりたいと相談すると、ほしい作品をすべて買ってくれ、と。数点を譲ってもらえたものの、僕らがすべて買うことなど不可能でした。

絵本作品が必要だった僕たちは、粘り強くスイスに通いつめました。年5回渡航した年もあるほどです。カスパールさんからようやく「父の絵で貸せるものは協力します」との許可が下り、1999年に念願の"ハンス・フィッシャーの世界展"開催がかないました。「ずいぶんしつこいやつらだ」とあきれられたのかもしれませんね（笑）。

スイスでは学校、空港、カフェなどにフィッシャーの壁画がたくさんあります。学校を訪れ、若い先生に壁画のことを質問してみると「知らない」との返答が。フィッシャーの遺した芸術品が過去へと埋もれつつある状況に、寂しさを感じたこともありました。

しかし数年後、再び学校を訪れると、校長先生や教育長さんたちが僕らの訪問に、チーズとワインを用意して歓迎してくれました。さらにはおみやげにと、あの美しい教科書を1冊ずつ譲ってくださったのです。僕らがフィッシャーを追い続けることで、スイスでの認識もしだいに変わっていったのかもしれません。うれしいことですね。

絵も一緒に描かれた、貴重なフィッシャーの直筆サイン。

武井 利喜　たけい・としき

小さな絵本美術館館長。岡谷市の自宅で13年間文庫活動を続け、絵本の展覧会などを開催。児童文学研究者の瀬田貞二、光吉夏弥らとは趣味の古書収集を通じて「カードのまくり」※で本を競り合っていた関係。

※トランプをめくり、大きい数字を出したほうが勝ちというゲーム。

著作権保護コンテンツ

後編

10歳から15歳に出合っておきたい本

10歳から15歳とは、子どもから大人へ、新しい世界へと一歩を踏み出すための準備期間。
前編に引き続き、各界で活躍する方々に、そんな時期に「出合っておきたい本」を教えていただきました。

撮影／澤田 和廣

本好きな君に贈る5冊

長田 弘さん

15歳までのあいだに読んでおきたい本は、15歳を過ぎるといつのまにか手にとりがたくなって、いつか手にしないままになってしまう本、絵本です。というのも、その年齢を過ぎてずっと後になって、ふとしたときに、あのときあの本、どうして手にしないままになったんだろうと、ふりかえってきっとそう思うのは、やはり絵本がいちばんだからです。大人になる前に読んでいれば、きっと本の好きな大人になれるだろう、5冊の絵本。

『水曜日の本屋さん』
文／シルヴィ・ネーマン
絵／オリヴィエ・タレック
訳／平岡 敦
1,500円（光村教育図書）

『エリザベスは本の虫』
文／サラ・スチュワート
絵／デイビッド・スモール
訳／福本 友美子
1,600円（アスラン書房）

『ルリユールおじさん』
作／いせ ひでこ
1,600円（講談社）

『ぼくのブック・ウーマン』
文／ヘザー・ヘンソン
絵／デイビッド・スモール
訳／藤原 宏之
1,400円（さ・え・ら書房）

『バスラの図書館員』
絵・文／ジャネット・ウィンター
訳／長田 弘
1,600円（晶文社）

おさだ・ひろし

詩人。詩集に『深呼吸の必要』（晶文社）、『長田弘詩集』（ハルキ文庫）、『世界は一冊の本』『詩の樹の下で』（ともにみすず書房）など。最新刊は『なつかしい時間』（岩波新書）。

著作権保護コンテンツ

この人にあれもこれも

こんにちは！絵本作家さん

「ばばばあちゃん」シリーズなどでおなじみ！

さとう わきこさん

私を導いたもの

生まれも育ちも東京のさとうさん。
現在は長野県岡谷市に在住し、2館の絵本美術館を運営しながら創作活動を続けています。
小さいころから好きだったものが重なり続け、今いる場所につながった縁についてお話しいただきました。

撮影／石川 正勝　取材・文／菅原 千賀子

「風邪のかみ」から「黒ちゃん」へ

私、よくここまで生きてきたなと思っているの。病弱だったんです。6歳で小児結核を患い、吐血。18歳では腎臓結核になり、おなかをばっさり切る手術を受けて2年間の療養生活を送っていました。子どものころの写真には、やせていて、姉の後ろから顔をちょっぴりのぞかせる私が写っています。それに、しょっちゅう風邪を引いていたので「こんこん」「風邪のかみ」なんていうあだ名もあったっけ。5つ上の姉による命名です。

小さいころは東京の大井町に住んでいました。隣の家の3歳くらいのかわいい男の子が、私を慕ってしょっちゅうやってくるので、いつもふたりで遊んでいました。けれど結核になってからは「ぜったい遊んじゃいけない」と言われ、それっきりのさよならに。あの子に元気でいてほしいと今でも思っているの。これが最初の恋人との別れだったのね、悲しかった……。

その後療養のため、練馬の大泉学園に引っ越しました。地名のとおり泉があって、澄んだ水がこんこんと湧いている。美しい景色があちらこちらにあり、この場所が大好きになりました。環境が変わると体も丈夫になり、外遊びでいつも日焼けして真っ黒。いつの間にやら「ごぼう」「黒ちゃん」たるあだ名がついちゃった。

著作権保護コンテンツ

ぜーんぶプレゼント 新刊100!!

もう読んだ？

2012年12月～2013年2月までに発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。プレゼント応募はアンケート用紙、またはウェブから。

※出版社五十音順

乳 マークは乳幼児から、

中 は中・高校生も楽しめる本です。

『おこさまランチ いただきま～す』

ハンバーグにオムライス、スパゲッティとフライドポテトと、子どもたちの大好きな食べものが次々に登場します。フォークさんとスプーンさんに案内されて、汽車の形の入れものに乗ったら、お子さまランチのできあがり！

作／真木 文絵
絵／石倉 ヒロユキ
850円（岩崎書店）

『ふかい あな』

トラから逃げようと走り出したカエル。落ちたところは飛んでも跳ねても出られない深い穴。ネズミが助けに来ましたが、一緒に穴の中へ。次々とやってきた動物たちも落ちて、声をそろえて「なんてこったい！」。登場する、珍しい動物たちにも注目です。

文／キャンデス・フレミング
絵／エリック・ローマン
訳／なかがわ ちひろ
1,500円（あすなろ書房）

『チャーリーの はじめてのよる』

ある雪の日、ヘンリーは子イヌを抱いて帰ってきました。チャーリーと名づけ、「これからは、ここに住むんだよ」と言い聞かせます。寝るのは別々だけど、鳴き声が聞こえたら、駆けつけなくちゃ！　ふたりがともに過ごした、はじめての夜のおはなし。

文／エイミー・ヘスト
絵／ヘレン・オクセンバリー
訳／さくま ゆみこ
1,300円（岩崎書店）

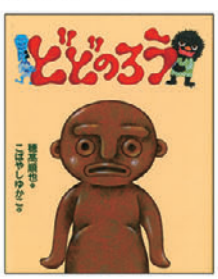
『きょうはすてきな ドーナツようび』

町でいちばんのおいしいドーナツ屋さんが、ケガをして臨時休業！　町中の人はがっかりですが、もっとがっかりしたのは、お店に残ったドーナツたち。「できたてがいちばんおいしいのに！」と、みんなに喜んでもらいたくて、町へ飛び出していきました。

文／竹下 文子
絵／山田 詩子
1,400円（アリス館）

『どどのろう』

昔々、どどのろうという泥人形がありました。言い伝えでは、願いごとを言うと、３つまでかなえてくれるとか。ある日、ふたりの悪党がこの人形を手に入れました。恐ろしいばけものになって、大暴れをしたところまではよかったのですが……。



作／穂高 順也
絵／こばやし ゆかこ
1,300円（岩崎書店）

『まんげつの こどもたち』

満月の夜を待っていた子どもたち。おもちゃの車に乗って、タヌキに担がれて、コウモリに引っぱられて、クマにおんぶされて、めいめいに集まります。あわてなくても大丈夫。さて、子どもたちはどこに集まるのでしょうか？

作／軽部 武宏
1,300円（イースト・プレス）

『あんよ あんよ』

白と黒のかわいい足があんよしています。パンダちゃんだったのですね。クマさんもおサルさんもゾウさんもあんよが上手です。次はおうくんの番ですよ。お母さんのところまであんよできるかな？　「あんよ　あんよ」と歌うように読んであげましょう。

文／中川 ひろたか
絵／ささめや ゆき
800円（あかね書房）

『イソップの おはなし』

「キツネとカラス」「町のネズミといなかのネズミ」など、９編のイソップのおはなしがまとめられています。舞台の幕が開き、19世紀風の衣装をまとった動物の格好をした子どもたちが演じるという趣向でお楽しみください。

再話・絵／バーバラ・マクリントック
訳／福本 友美子
1,300円（岩波書店）

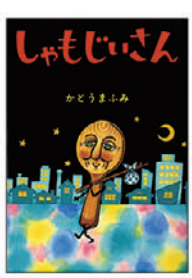
『あわてんぼ うさちゃん』

春のパーティーの準備をしていたうさちゃんは、テーブルの下にたくさんの卵を見つけました。急いで卵のママに運ばなくてはなりません。ちょっとあわてんぼうのうさちゃんは、届け先を間違えてばかりで大変なことになってしまいました。

文／ティモシー・ナップマン
絵／デイヴィッド・ウォーカー
訳／ひがし かずこ
1,100円（岩崎書店）

『しゃもじいさん』

めっきり仕事のなくなったしゃもじいさんは、使ってくれる家を探して旅に出ました。途中で出会った欠けた茶碗や皿、焦げた鍋たちも加わって一軒一軒のぞいてみますが、新しい居場所は見つかりません。とうとう町はずれの寺にたどりつきました。



作／かとう まふみ
1,200円（あかね書房）